

INTERVIEW：インタビュー



ミュージシャン・作詞家・プロデューサー

サエキけんぞうさん

今回は、歯科医師の免許を持ちながら作詞家・音楽プロデューサー・ミュージシャン等いくつかの顔を持つサエキけんぞうさんです。ご自身の経歴やロックその他の音楽や著作権に関わる問題について、掘り下げてお話しいただき、個人的にも大変勉強になりました。

(聞き手・構成：高橋 辰三，西川 達也)

—— インタビューに当たり、ご著書『ロックとメディア社会』を読ませていただきました。小さい頃からロックに傾倒しており、ディスクユニオンに出入りをしていたそうですね。

そうですね。そんな小学生でした。

—— 当時、同級生や周りの大人から見て、そのような少年はどのように見られていたのでしょうか。

当時は、釣りやアマチュア無線など、1つの趣味に没頭する子供が結構いましたから、外からはよく分からない世界に没頭している子供の1人という風に見られていたと思います。当時通っていた教会に、学生運動をしているお兄さんとか、ローリング・ストーンズのレコードを貸してくれる人がいましたね。ゴーゴー喫茶に出入りしている人もいて、当時の若者の人間関係の在り方や、1960年代特有の政治的・風俗的な流れも直に感じることができました。

—— ローリング・ストーンズという名前が出てきましたが、ロックミュージックを好きになるきっかけとなったバンドやミュージシャンはいますか。

ビートルズとローリング・ストーンズですね。ただ不良性を意識させるという意味では、ローリング・ストーンズの影響は大きい。見るからに悪い感じがするし、「ジャンピン・ジャック・フラッシュ」という曲のビデオクリップで度肝を抜かれました。実物を持ってきます。(サエキ氏レコードを探しに行き中断)

—— 面白いインタビューになりそうです。

これが当時出ていたローリング・ストーンズの『あなたが選んだゴールデンアルバム』。ローリング・ストーンズのアルバムで最初買ったもので、今では手に入らないようなタイトルです。人気投票で選ばれた曲が入っているレコードです。

—— これは当時買ったものですか。

そうです。当時最初買ったシングルはこれです。ジャケットの怖さに、ビートルズとは違う、他者を威嚇する感じに強く惹かれましたね。

—— 一番衝撃を受けたのは、やはり「ジャンピン・ジャック・フラッシュ」ですか。

そうですね。このシングル盤は2番目に買ったものですが、黒人音楽を白人が黒人よりかっこよくこなしていることに衝撃を受けました。一生通じて聴けるもの、そして一生通じて思想に影響を与えるようなものに早くから出会えたことで、その後の私の人生が決定づけられましたね。

—— ミュージシャンになろうと意識をしたのはいつごろでしょうか。

今までミュージシャンになろうと意識したことはないですね。僕はそういう意味ではミュージシャンではなく作詞家です。

高校時代の仲間とニューウェーブムーブメントに関わる中で、アルバムを出すことになったのですが、その間も歯医者になるべく歯科大学を目指していました。そして、そのまま大学を卒業したら、今度はパール兄弟でデビューするチャンスがめぐってきたのです。

音楽業界って波があって、ある種のムーブメントの中でデビューできるときはできるものです。チャンスは向こうの方からやってくるので、巡ってきたチャンスなりきっかけなりに、つじつまを合わせて、お金もそれに合わせてもらえるようになる、というのが正しい流れなのだと最近気づきました。

—— 作詞を始めた経緯は？

自分のバンドであるハルメンズでデビューしてから、日本歌謡曲シーンで重要な役割を担ったディレクターであるビクターレコードの田村さんが、僕に声をかけてくれて、伊藤つかさ、小泉今日子、うしろ髪ひかれ隊、その他アイドルの詞を書くことができるようになりました。

—— ムーンライダーズの「9月の海はクラゲの海」の詞が特に好きです。

ムーンライダーズは、ハルメンズのプロデュースが鈴木慶一さんだったことがきっかけです。ハルメンズ活動中に「マニア・マニエラ」の詞を発注されました。作詞は、大学在学中から行っていました。当時はまだファクシミリがあるかないかという時代で、完成した詞を手紙で送ったり、電話で送ったりしていました。

—— 作詞の際のストーリーやイメージについて、どのように着想を得ていますか。

今、NHKの『サエキけんぞうの素晴らしき80's』というラジオ番組で、1980年代の歌謡曲を中心に紹介していますが、流行歌というのは職業作家が、その時代の男女関係を面白おかしく書くことがフォーマットになっているのです。

ですが、例えば山口百恵の「イミテーション・ゴールド」は大好きな曲ですが一方で、シャワーの後で髪をかきあげてアンニュイそうに恋をニセモノかどうか考える男女関係って、いったいどこにあったのかという疑問が、昔も今も僕の中にあるんです。僕が書きたかったのはシュールな言葉使いをしながらも、身の回り、あるいは本当の意味で世の中で起こっていることについての詞なんです。

だからアイドルについても、その点を譲ることができなくて、ニューウェーブというカテゴリーの中に自分を落とし込みつつも、自分の詞については本当の世の中、あるいは若者が心理的に体験している状況をどう描くかという気持ちで書いていました。だから、僕が書く詞は流行歌とは違うと思ったし、逆に言うとそんなに立ち位置が変わらずに今までできているので、古い曲も皆さん変わらず聴いてくれています。

—— 歯科医師の免許も取得されていますが、歯科医師の道と迷われませんでしたか。

やりながら迷っていました。しかし、作詞の仕事は、間違いなく替えが利かなくて、僕の代わりに誰か他の作詞家にやらせるとなると、全く意味が違ってくるわけです。

—— ロックやポップ音楽の評論について多くのご著書を出されていますね。最近の音楽をめぐる状況について感じていることは？

近年で驚いたのはクールジャパンです。まさか歌謡曲やロックじゃなくて、アニソンが海外に普及して、しかも日本語で歌われているようなシーンに出くわすことになるとは思いませんでした。こういった、まるで思いもしなかったような、完全に常識を覆すようなことが起こっているわけです。

他に、著作権についての考え方が変わってきているような状況も起こっていますね。

—— 著作権の考え方が変わってきているとは？

例えばサンプリングについて。少し前にデザイナーのコピー問題が起きましたが、サンプリングということについて、産業レベルで最初に考えたのは音楽業界です。1980年代後半にAKAIという会社から優秀なサンプラーが発売されて、早速使われ始めました。

これは弁護士の方向けの雑誌だからお話ししておきますが、実はそのころものすごく大きい国際的な訴訟が起こったのです。原告、被告とも伏せますが、誰もが知る有名なバンドが日本のバンドを相手に訴訟して、公表されないまま巨額の賠償金が支払われたという事件がありました。これは弁護士の方々もご存じないでしょうね。秘密に伏されていますが、次世代のバンドのためにも、そういった事件があったことについては知っておいた方がいいと思います。

皆さんが知っている有名な事件としては、ジョージ・ベンソンの曲をサンプリングした『DA.YO.NE』という曲に関するものがあります。原曲のピアノ奏者が来日して、偶々空港から乗ったタクシーでその曲が流れていて、自分のピアノが鳴ったと思ったら、次の瞬間に原曲とは全く違う先ほどの曲名のフレーズが流れたというものです。

—— 情報収集がしやすく、一般の人も楽曲を作れる現代では今後どういう流れがあると思いますか。

『ロックとメディア社会』で指摘したのは、ロックなり歌謡曲なりというものが、経済活動として消滅しかねないということです。その過程の中に起こったことが、まさに今のサンプリング問題です。主にアメリカでは、実は1993年からサンプルしたものを循環させるブレイクビーツというものが、ポップスづくりの基本になっていました。そういう手法で作られたものが、ヒットチャートの8割ぐらいを占めるような時代が、1994～1995年にやってきたのです。そうすると、ブレイクビーツは著作権上認められるかどうかということが問題になります。

ところが最終的にどうなるかという、1997年頃にアメリカでサンプリングに関する訴訟が頻発して、いわゆる使用許可音源以外で使うと、著作権侵害ということになりました。この結果を受けて、1997年ぐらいからアメリカのヒップホップは、サンプルから打ち込みに変化していきました。突如として音楽の傾向が変わっていったわけです。

—— なぜサンプルから打ち込みへ変化していったのですか。

今までと同じようにサンプリングをしていると著作権侵害になるわけですね。だからヒップホップではサンプリングを行った上に打ち込みを乗せたり、音を抜いたりしています。そうすると、サンプリングした音源のリズム感覚を得ながらも、法的に問題のない音楽が作れます。1996～1998年に音楽はこのような方向性に変わります。

法律によって、音楽そのものの作られ方が変化したのです。だから、芸術と法律の関係、そしてそれによって推移していく音楽の作られ方は、これからの未来を考える上で重要です。僕自身は、サンプルの循環であるブレイクビーツは2000年代後半には飽きられると予想していましたが、意外と飽きられずにポップスの本質の1つみたいになってきましたね。

その一方で何が起こったかという、肉体のつくる音楽、つまりバンド演奏がものすごく上手くなった。

—— 上手くなるというと？

クリックというリズムボックスにバンド全員が合わせた演奏が行われるようになって、異様に上手くなったのです。一糸乱れぬ演奏というか。

しかし、上手くなった一方で、生演奏がつまらなくなってしまった。これも全く予想できなかった。つまらなくなっていったのは、若い世代の演奏ですね。若い世代は行儀がよく、よく学習をする世代だから一生懸命リズムボックスに合わせた演奏ができるようになるのですが、その結果、人間味がなくなって演奏がつまらなくなったのです。

僕が今予測していることは、面白い演奏とは何かということについて追求し続けている人の音楽が、面白くなっていくということです。そういう意味では、昔から同じことを続けている名演奏家が、神格化されていっています。ローリング・ストーンズとか、ボブ・ディランがうけている理由もそういったところからです。

—— ポール・マッカートニーもですか。

ポールもそうですね。10年毎ぐらいに進化を遂げていますが、実は今お話した歴史と密接な関係があります。『マッカートニー II』(80年)でテクノのデジタルサウンドを実験的に取り入れて、そうしたリズムを10年弱こなしきった上で生音に回帰した『フラワーズ・イン・ザ・ダート』(89年)を発表してツアーを再開しました。

そして、余り知られていませんが『ドライヴィング・レイン』(2001年)ではブレイクビーツに合わせた演奏を取り入れています。これが2000年代の活躍につながっています。ポールは、身をもってすべての時代の実験をしてきていて、まだまだ発展を続けていますね。

—— セルジュ・ゲンズブールやクロード・フランソワなど、フランスのアーティストの紹介をされていますが、フランス文化への思いはどのようなものなのですか。

私の「スシ頭の男」というソロ・アルバムが2003年にフランスでも発売されたのですが、『リベラシオン』を筆頭に、有力雑誌がこぞって大絶賛してくれました。それで、フランスでライブができるという面白い展開になりました。すごくうれしかったですね。それまで8～9年間、ゲンズブールの曲を楽しむイベントをはじめ、

ゲンズブールを愛でる活動をしてきましたが、そういった活動が実って、こちら側からフランス本国にフィードバックすることができるようになったわけです。

ゲンズブールという人物は面白く、ある種デヴィッド・ボウイやビートルズ、ミック・ジャガーのようなカリスマなんだけど、英米のロック・スターとは全く異なる個性です。ゲンズブールはロックは不得意なんですね。ゲンズブールは、ジャズ、ラテン、アフリカ音楽、レゲエ、ヒップホップに至るまで、どちらかといえば有色人種寄りのコスモポリタンの曲が多いのですが、それらを長年分析的に聴き続けていくことにより、ロックでは得られない広い視座を得られました。つまり、第三世界への足掛かりを、ゲンズブールから得られたのです。

ゲンズブール好きは皆ゲンズブールをまねて、「どうだ、かっこいいだろう!」というカリスマをまねるプライドを持っています。ちょっと石原裕次郎に似てますね。で、真似てるうちにフランス人らしい独特のカッコいい視点で、第三世界にも造詣が深くなる。ミック・ジャガーやポールからは得られないような知識が得られる。そんなヒーローについていくことでロック方面では特別なプライドも得られました。

——著書で、ロックには本質的に反抗というメッセージがあると書かれています。近時、国会前で若者たちがデモ活動をしています文化的側面で感じられることはありましたか。

そうですね、僕は1960年代末の学生運動を子供の視線でリアルタイムに見てきました。緊張感とバイオレンスな感じがあり、権力というものの実体が明らかになっていました。直接的な形では機動隊の姿ですね。

一方で、今のSEALDsなどの国会前のデモに対しては、権力側の実体はまだ出てきてないのですよ。権力側は本当の歯をむいていない。なぜか。それを今やると、世論が本当の意味で硬直化してしまうからできないのだという考え方もできますし、まだまだ若者に本当の意味での権力の本性というものを知らせなくていい、ジワジワ真綿で締めつけて、動きがとれなくなったところで、目に物をいわせてやる、という考えがある気もします。

今後、権力側がどのように出てくるのか分かりませんが、僕としては言いようのない怖さはあります。

——80年代にパール兄弟で一世を風靡されて、その後もミュージシャン、プロデューサー、評論家として、常にその

時代の第一線で活躍されていますが、活躍されるために心掛けていることはありますか。

自分の好奇心を追求し続けてきたということだけです。結局、僕の興味は、時代によって変化する人間集団の在り方、そしてその在り方によって変化する集団の思想に興味が取込まれていくんです。

そういう意味で大きかったのは、小学校4年生のときのグループサウンズとロック。次に大きかったのは、はっぴいえんど。そして飛んで、ハルメンズというものを始めるきっかけである、パンク、ニューウェーブです。

次に、実は渋谷系に影響を受けていないということですね。そのころ自分は既に影響を与える側にいたので、一足飛びで秋葉原の方に向かったんですよ。秋葉原は暴力的なおいはしないけど、明らかにうごめいている何かがあった。メイドカフェができたところ名古屋と秋葉原でかなり通って、その中でディアステージという秋葉原のメイドカフェに出会い、でんぱ組.incの名付け親になるところまでいきました。

今は、「YouTube」によって著作権の巨大な破壊が起こってしまったんですけども、破壊によってとんでもないことが起きるときって、歴史的な大きなシステムが暴かれるチャンスなんでしょうね。以前にもサイケデリックというものが分解していったときに、やはりすごく音楽業界の歴史が動いていったんですよ。結果的にはそれで音楽業界のみならず、若者の立ち振る舞い、風俗自体がそこで変わってしまった。

——最後に弁護士に対するメッセージをお願いします。

皆さん公正に生きていけば大丈夫というふうにしかなってないんですけど、世の中というのは時にものすごく荒っぽい動きをします。いつ災難が降りかかってくるか分からない。その荒っぽい動きというのは、確実に悪が多いので、自分が正しいか正しくないかではなくて、そうした動きに対しては法というものが意味を持ってくるし、その運用で弁護士さんには頑張っていたきたいなというふうに思っています。

プロフィール さえき・けんぞう

ハルメンズとしてデビューし、パール兄弟のボーカリストとして活動する一方、作詞家として数々のアーティストに詞を提供、文筆活動、音楽イベントの主催、アイドルのプロデュースなど多方面で活躍している。